

かんの きくえ
菅野 菊枝さん 株式会社菅野養蜂場 取締役

1956年生まれ、東京都台東区浅草出身。大学卒業後、豊島区駒込の病院で管理栄養士として勤務。26歳の時に、株式会社菅野養蜂場の3代目である夫と結婚し、訓子府町へ。町の教育委員を12年間務め、地元小学校で、みつばちの生態や採蜜技術まで授業の一環として教える食育活動にも従事。



感動と情熱に導かれ、国産天然はちみつの普及に全力!

きっかけ

実家は、東京都台東区浅草で卸問屋を営んでいましたが、跡継ぎの兄が数年間、鹿児島島の養蜂場に弟子入りし、その数年兄弟子に夫が居ました。それが縁で、26歳の時、菅野養蜂場3代目の夫と結婚。訓子府町に来ました。小売を始めたのは、平成3年から。蜂蜜は、父の代(2代目)まで100パーセント問屋卸しで、そこで安価な輸入品を混ぜ、市場で売られていました。夫婦ともに、その売り方に疑問を感じ、輸入品を混ぜずに自分たちで売る小売へと転換しました。はちみつ好きの方々の間で、ようやく定着してきた感じです。

苦勞

菅野養蜂場は、蜜源花を追って移動する転地養蜂家です。現在は、1月から5月中旬まで静岡県伊豆市修善寺、岐阜県大垣市を巡り、5月下旬ようやく拠点の訓子府町へ戻るとい生活です。子どもの手が離れるまでの17年間、冬の間、夫は本州へ単身赴任し、私が訓子府町で子育てと両親の世話をしていましたが、冬に男手がないのは生活面でとても厳しいものでした。1991年に小売へ転換しましたが、始めた当初は、夫と地元の商店から一般家庭まで一戸一戸販売して回り、軌道に乗るまで5~6年掛かり、1998年頃までは設備投資の借金返済に追われる日々でした。

満足度

夫の蜂蜜採取の技術と姿勢、ミツバチに対する愛情には100パーセントの信頼を持っています。私たちの蜂蜜は、無農薬地帯での採蜜とミツバチに抗生物質を与えないことで、250種類の農薬や抗生物質が一切検出されない高品質を誇っています。自然に恵まれた北海道の蜂蜜の品質は高く、特に、菩提樹(シナノキ)からとれる蜂蜜は日本一と確信していますが、知名度はあまり高くありません。この菩提樹から採れる蜂蜜の素晴らしさを、広く知らせていきたい。それが、私たちの今後の課題です。

これから

人類最古のお酒とも言われ、「ハニームーン」としてヨーロッパで親しまれているハチミツ酒「ミード」を、菩提樹蜜で作ろうと考え、北海道初の「菩提樹のミード」を2014年に誕生させました。まさに私たちの思いが詰まった結晶です。国産ミードの製造も広がりがつあります。ミード文化が日本にも根付くように、北海道から発信していきたいですね。4代目の後継者も決まり、ともに今後も北海道養蜂の発展に全力を尽くしたいと考えています。

北の★女性たちへの
メッセージ

養蜂という仕事、ミツバチの素晴らしさ、北海道の雄大な自然。全てが感動、感動の連続でした。生活面で大変なこともありましたが、それよりも北海道の蜂蜜やみつばちの素晴らしい世界を多くの方に理解してほしい。その想いが大変さを上回っています。女性たちには、自分の抱いた思いを忘れず大切に、まい進してほしい、そう思っています。

くらもと
倉本 ひと恵さん オホーツクキャリアデザインネットワーク 代表

1963年生まれ、北見市出身。アナウンサーなどを経て、26歳で倉本鉄工所（北見市）専務の夫と結婚。3人の子育てを経て、2009年に自宅を改装し「オホーツクベーグル」を開業。安全・安心な品質に定評があり、地元食材にこだわったベーグルづくりに日々奮闘中。



「全てがキャリア！」幅広いネットワークで地域の活性化を

きっかけ

2014年3月、北見市内で行われた十勝キャリアデザインネットワークの北村貴さんの講習会を聞いたのがきっかけです。北村さんのお話を聞いて、ぜひオホーツクでも十勝のような働く女性たちのネットワークがほしいと思いました。同年11月に準備組織を立ち上げ、2015年4月に正式に発足しました。現在の会員は26人で、30～50代の北見市内や近郊町村で働く女性たちです。スタートしたばかりで、まだ手探り状態ですが、働く女性だけでなく、幅広い層の女性たちの参加を目指しています。

苦労

「働く女性たちのネットワークをつくり、地域の活性化に貢献したい」。会の発足に携わったメンバーの思いは共通でしたが、いざ新しい組織を立ち上げるとなると、規約の作成など具体的な細かい作業と知識が求められました。発足したばかりで、運営費はなく、フォーラムやデザイン大賞の費用の捻出も大きな課題でした。グループを作り作業を進めていますが、メンバー同士の情報交換の中で補助金の存在を知り、上手くそれを活用できることになりました。あらためてネットワークの大切さを実感しました。

満足度

発足したばかりなので、今後の展望などはまだ描き切れていませんが、2016年2月には、初のキャリアデザインフォーラム開催を準備しています。脚本家の大石静さんを招いてのトークショーと、第1回オホーツクキャリアデザイン大賞の表彰式をします。表彰は①起業・事業家部門、②キャリア部門、③特別部門「夢を語る」の3部門。すでに数件の応募があります。フォーラムで、「やる気」や「元気」を感じてもらったり、「自分も何かやれるのでは」と思ってくれる方が一人でも出てくれるといいな、と思っています。

これから

現在のメンバーは、自分で起業、または実家の事業を継承など、経営サイドの女性が多いですが、会では、「子育ても介護も立派なキャリア」と考え、幅広い女性のネットワークにしたいと思っています。私も6年前に起業しましたが、「起業はハードルが高い」と感じていました。集う仲間や先輩がいると心強く、女性ならではの育児、介護などの問題を相談しやすい、というメリットもあります。オホーツクキャリアデザインネットワークでは、仲間作りを通して地域活性化に寄与し、次の世代に繋げていきたいと思っています。

北の★女性たちへのメッセージ

自分が今まで生きてきたこと全てがキャリアです。起業したとか、素晴らしい実績を積み重ねてきたということだけではなく、「年月を積み重ねてきたキャリア」があります。立場はそれぞれ違って「オホーツクを盛り上げる」という点で一致できると思っています。是非、ご一緒に！

たざわ ゆり
田澤 由利さん 株式会社ワイズスタッフ 代表取締役、株式会社テレワークマネジメント 代表取締役

1962年生まれ、奈良県生駒市出身。上智大学卒業後シャープに入社。退職後、株式会社ワイズスタッフと株式会社テレワークマネジメントを設立する。自宅できつろぐことができるのは月の3分の1程度だが、その時は高校生の三女とじっくりと向き合う。「普段会えない分、一緒にいる時は深まりますね」



テレワークを活用し、しなやかに輝く生き方を

きっかけ

大学卒業後、会社員として6年半勤めましたが、子育てや夫の転勤で退職しました。でも、能力と意欲があるのに同様の理由で退職する女性は大勢います。そんな女性を支援したい、という思いが強まり、北見市で、在宅勤務や在宅ワークが可能なインターネット上のオフィス「ワイズスタッフ」を1998年に立ち上げました。10年経った頃、ふと思いました。「在宅勤務する人をもっと増やすには企業を変えなければ」。そこで企業の在宅勤務導入などを支援するコンサルティング会社「テレワークマネジメント」を設立しました。

苦勞

テレワークが広がれば、それぞれの個性や能力、生活環境に応じた働き方が可能となります。でも、これまでの日本の社会では、9時から17時まで、オフィスに来て働くのが当たり前というのが絶対的な価値観です。また、テレワークを導入すると人間関係が希薄になるのでは、と懸念する方もいます。テレワークはすべての仕事を在宅で、ということではありません。会って話すことはコミュニケーションの基本です。これを補完する柔軟な働き方がテレワークです、ということをお皆さんに伝えています。

満足度

「テレワーク」とは「離れた場所で仕事をする」こと。働きながら子育てしている方は、保育園などで子どもが熱を出した場合、仕事を中断して迎えに行かなければなりません。在宅勤務が可能になれば、子どもを迎えに行き、自宅で仕事の続きができます。また、北海道で子育てを、と思っている方もたくさんいます。テレワークが実現すると、東京都から北海道に住もうと思う方が増え、北海道の活性化にもつながるのでは。柔軟で活力のある社会の実現に向けて取り組んでいる、という充実感があります。

これから

テレワークと並行してテレエデュケーション（遠隔教育）への取り組みを考えています。都市と地方の教育格差が問題になっています。ICTを活用し、通常の教室と同様に、決まった時間に席につき、先生と議論しながら教育を受けることができる環境を提供することで、こうした問題の解決の一歩となるのでは、と考えています。教育も、テレワークと同様に人との出会いが不可欠です。ICTをバランス良く組み合わせる中で、地方にとって望ましい教育環境の創造が可能になると思います。

北の★女性たちへの
メッセージ

壁にぶつかり、悩んでいる皆さん。そんな時は周囲をよく見て下さい。抜け道があるかもしれません。壁を壊すことのできる道具が見つかるかもしれません。くじけず、焦らず、しなやかに生きることを忘れずにいれば、道は必ず開けるはずですよ。

たなか ゆき
田中 夕貴さん 北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議 代表

紋別市出身。父親の急死後、家業の紋別セントラルホテルへ入社。現在常務取締役。
23歳で紋別青年会議所に入会し、2006年には理事長を務める。



「未来のためのみちづくり」を女性の視点から発信

きっかけ

紋別市では、2005年から産科医師不足により市内で出産することができなくなりました。そのため紋別市の妊産婦の多くは、50km以上離れた遠軽町まで通院し出産しなければならなくなりました。私自身も遠軽町で子どもを出産しました経験から、地域と地域を繋ぐ安心安全な「みち」は、私たちの暮らしに必要なものと実感し、2007年に「オホーツクのみちと未来を考える会」を立ち上げ、2010年からは、全道組織の「北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議」（みちネットの会）の代表にも就いています。

苦勞

毎年、各地の住民団体の代表の方々とともに上京し、国への要望活動も行っていますが、要望通りにはなかなか進まず心が折れそうになる時もあります。それ以前に道外の方には、北海道が日本の国土の1/5も占めることや、都市間の距離、貢献度などを認識してもらっていないことがとても多いと感じます。皆さんに北海道のことをもっと知ってもらい、理解して頂くことが必要です。行政だけに任せるのではなく、私たち市民も一丸となりオール北海道として諦めずに声を上げていくことが大切だと思います。

満足度

活動を始めて多くの方と出会い、北海道各地の魅力や資源を知ることができました。一次産業や観光はもちろん、環境問題やエネルギー問題など、私たち北海道は日本人の豊かな暮らしに多大な貢献をしていると、誇りを持つことができました。その反面、地域の課題も共有しました。それらの課題解決のために、私たちの運動はまだまだ続けなければなりません。北海道の暮らしを守ることは、日本人の暮らしを守ること。子どもたちの未来を守るためにも、私に与えられた使命と思って頑張っていきたいと思っています。

これから

現在では、女性の視点から道づくりを考える懇談会「Rosehips（ローズヒップス）」という女性団体も立ち上がり活動しています。「ローズヒップ」とは「ハマナスの実」のことです。北海道の花であり、紋別市の花でもあります。厳しい自然環境の中でも美しい花を咲かせ、栄養豊富な実をつける花。私たちは「みち」だけでなく、北海道のため、地域のため、私たち自身のためにできることから始めていきたいと思っています。北海道のみちづくり、そして女性の活躍の場づくり、これからもたくさんの仲間と力を合わせ、続けていきたいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

もしも今、悩んだり心が迷子になっている女性がいたら、常識や人と比べたりせず、焦らず無理せず諦めず、自分が納得できる「貴女らしいみち」を見つけてね！未熟な私がこれまでたくさんの方に支えて頂き励まして頂いたように、貴女のそばにも貴女のみちを照らしてくれる方がきっといるはず！

みちやま
道山 マミさん 合同会社大地のりんご 代表

1969年生まれ、千葉県出身。1992年東京農業大学オホーツクキャンパスを卒業し、百貨店で販売業を経験。2011年に製造・販売を中心とした「合同会社大地のりんご」を網走市で立ち上げ、代表に就く。



T-1グランプリチャンピオンが地元意識を変える

きっかけ

大学生の頃、農業は汚い・苦しい・危険の3K産業と言われていました。でも日本の農業を大切にしたいと卒業後もずっと思っていました。東京で働き、結婚し、子育て中だった30代後半のある時、大学の恩師から「農業支援のベンチャー企業を網走市で立ち上げないか」と声がかかりました。夫と相談し、2人の子どもを連れて網走市に戻ることを決断しました。当時の網走市は原料があっても農産物の加工施設がない、施設があってもノウハウがない、という状況でした。生産者と加工業者を繋ぐ中間支援を、と思い立ち上げました。

苦勞

女性は結婚や子育てで仕事制限されますよね。仕事を始めてからは、子どもを優先していないと自分を責め、家庭を暗くしてしまう時もありました。家事も仕事も、すべて自分でやろうとすると苦しくなります。「大地のりんご」では、昼の3時間だけ働ける主婦の方をパートで雇っています。同じ勤務体制の人を組み合わせれば1人分になります。60代以上の高齢者でもすごく手際がいい。やれることは実はたくさんあります。できる、できないというのは実は工夫次第。活躍の場を提供したいと思っています。

満足度

会社立ち上げ後、山わさびの規格外品活用の相談があり、農家の話を聞き回っている時、山わさびの粕漬に出会いました。今の家庭では作られなくなり、失われつつある食文化です。多くの農家からレシピを集め、原料、設備から知恵まで、地域の方から多くの協力をいただき完成させました。それが漬物日本一を決める「T-1グランプリ」で初代グランプリに輝いた「ガツンと辛い山わさび粕漬」。みんなが「うん」って納得できるものにするには時間と苦勞がかかりますが、同時にやりがいも感じます。

これから

グランプリ獲得後、環境はがらっと変わりました。全国の方が認めてくれたことで、「こんな手作りの田舎の味、誰も食べないよ」と思っていた地元の方々の意識が変わりました。地域の可能性をできないづくしであきらめるのではなく、人がつながることで可能性が広がることに気付いたんです。情報をつなぐこと、それが「大地のりんご」の役目と考えます。販売に特化した「オホーツクテロワールド」も立ち上げました。寒冷地のオホーツクは農薬の散布が少なく済むことが特徴です。冷凍の有機野菜シリーズを生産者と連携し、販路を広げる仕組みにチャレンジしています！

北の★女性たちへのメッセージ

40、50歳でも新たに取り組めることはたくさんあります。つくりだす喜びはものづくりに限りません。インターネットの普及で多くのことが勉強できるし、まだまだ活躍できる場がある。そういう学ぶチャンスを女性もあきらめずにつかんでほしいです。がんばろうね！

十勝【帯広市】

きたむら たか
北村 貴さん 株式会社グロッシー 代表取締役

1967年生まれ、浦幌町出身。2007年に食をテーマとしたコンサルティング企業「株式会社グロッシー」を立ち上げる。女性の起業やキャリアアップをサポートする「十勝キャリアデザインネットワーク」の事務局長。食育や人口減少問題などの有識者会議の公職も務める。



限界を超えた時、新たな自分が見つかる

きっかけ

短大卒業後、大手石油メーカーに就職しましたが、もっと仕事の幅を広げたいと思い、2年で退職。人材派遣やコンサルティング会社などに転職しました。1997年に女性をターゲットにしたインターネット専門のマーケティング会社を立ち上げました。主に化粧品や下着メーカーなどをクライアントとし、商品開発から販売促進などを手掛けました。その後、リサーチのターゲットを「食」に絞り、そこから料理のレシピ開発や食育関連の各種イベントを催すなど、さまざまなコミュニティを広げていきました。

苦勞

マーケティングの仕事は、時代の最先端を追い求めなければなりません。常に頭をブラッシュアップ(磨き上げ)する必要があります。数年前に催した大手家電メーカーの調理家電の販促では、料理教室と組み合わせ、その家電の最新機能を際立たせるような仕掛けをしました。料理家と生徒とのコミュニケーションを広げながら、いかにして商品をPRしていくかが大変でした。すぐ結果が出るような仕事ではないので、いつも緊張感があります。

満足度

現在販売されている伊藤園の野菜ドリンク「充実野菜」のペットボトルには、当社が考案した当該商品の料理レシピが載っています。長年培ってきた料理家のネットワークを活用し、代理店を通じてパスタや煮込み料理などを提案、大変好評を得ています。2007年には「十勝キャリアデザインネットワーク」を設立。事務局長として、地域で働く女性をネットワークしながら、起業や社内におけるキャリアアップをサポート。2年に1回実施する「キャリアデザイン大賞」では、多くのロールモデルを輩出しています。

これから

2015年は、東京都で常設のキッチンスタジオ開設を目指します。そこでの料理教室はもちろんですが、スタジオの中にクライアントが求める商品開発の要素を取り込み、料理家のネットワークを通じて、さまざまなプレゼンテーションができるような空間を提供していきたいですね。さらに十勝だけではなく、他の地域についても、地元の方が地域の特産物についての素晴らしさをもっと知ってもらえるような、食育に関する講座を増やしていきたいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

マーケティングの分野では、女性だからこそ共感できるアイデアがあります。人は限界を超えた時、はじめて新たな自分を見つけることができます。色々なことに興味を持ち、女性ならではの感性を持って視野を広げてみてください。きっと何かが変わってくるはずです。

1927年生まれ、帯広市出身。宮坂建設工業創業者・宮坂寿美雄さんの次女として育ち、20歳の時に同社の社員だった紫竹勲さんと結婚。1983年に勲さんが死去。その後、帯広市郊外に1万8,000坪の農地を買い、1992年に紫竹ガーデンを開園する。



少女の夢、多くの人に幸せを運ぶお花畑に

きっかけ

56歳の時、最愛の夫・勲が亡くなりました。とても悲しくて泣いてばかりの毎日でした。ある時、長女の和葉から「お父さんは太陽のようなお母さんが大好きだったでしょ。泣いてばかりでいいの?」と言われました。「ああ、そうだ」と思い、考えました。「残りの人生で何ができるだろう」と。浮かんだのは「子どものころ大好きだったお花畑を作ろう」でした。でも、若くない、経験もない、お金もないの「ないないづくし」なので、みんなは猛反対。そんな時、和葉の夫の毅さんが「夢を持つのはその人だけの才能。誰も止めることはできない」と説得してくれました。

苦勞

購入した土地は農地でしたが、耕作放棄地のため、雑草と石が多く大変でした。でも土地をお世話してくれた方に「初代は苦勞して物事を成すものだよ。あなたは初代でしょ」と言われ「なるほどな」と思いました。庭をどうやって作るのかも分かりませんでした。そんな時、友人がイギリスでガーデンデザインを学んだ奥峰先生を紹介してくれました。庭の設計を引き受けていただき、これが紫竹ガーデンの出発点になりました。また、庭の造成工事も「勲さんには大変お世話になったから」と、地元の建設業者の方が協力してくれました。

満足度

オープン当時は年間2,000人ほどのお客様でしたが、今では10万人を超える方が来てくれます。本当にありがたいですね。夢のようです。お花畑を訪れた方は「幸せな気持ちになる」「すぐ癒やされる」と言ってくれます。「自分も、そしてみんなも幸せになるようなことをしよう」と考えて、この庭を始めました。野原のような庭は、四季折々の表情を見せてくれます。春の息吹、夏の躍動、秋の実り、そして冬の静けさ。訪れる方に少しでも幸せを提供できているのかな、と考えると、この庭を作って本当に良かったな、と思います。

これから

今は長女夫婦と孫たちが力を合わせて一緒に紫竹ガーデンを支えてくれます。私は、毎朝4時頃には起きて、庭をぐるっと回って雑草を取ったり、植え替えをしたり、虫を取ったりします。夢中になって夜の7、8時になることもしょっちゅうあります。でも、庭の仕事が大変だと思ったことは一度もありません。庭にいたことが大好きですし、疲れなんて全然感じません。この庭には今までに多くの方が訪れていただきました。でも、もっとたくさんの方に来てほしい、もっと喜んで幸せになってほしい、そう思うと庭づくりには終わりはありませんね。

北の★女性たちへのメッセージ

こんなことをしたい、でもできるかな、と悩んでいる方へ。自分に魔法をかけなさい。「できる」「やれる」って。人生は楽しいもの。つらいこともあるけど、そんな時はできる人が助けてあげなきゃね。私もいっぱい助けてもらったのよ。人と仲良くしていれば、手をさしのべてくれる方はきっといるから。あきらめないで。

十勝【帯広市】

たに 谷 あゆみさん ばんえい十勝 調教師

1966年生まれ、奈良県出身。帯広畜産大学卒業後、牧場に就職。その後、ばんえい競馬のきゅう務員として就職、2005年に調教師試験に合格。2006年、谷きゅう舎を開く。2012年に出産し、1児の母に。競馬場のきゅう舎で馬とともに生活を送る。



北海道の伝統文化をしっかりと次世代へ

きっかけ

午(うま)年生まれで、子どもの頃から馬の絵ばかり描いていて、自然と馬が好きになっていました。大きな動物を飼いながら絵を描いて暮らす生活に憧れ、大学進学で北海道に来ました。学生時代に、先輩に誘われて行った牧場でシンザンと出会い、卒業後、その日高管内の牧場に就職しました。牧場勤務時代にばんえい競馬を知り、そのダイナミックさに夢中になりました。1993年にばんえい競馬のきゅう務員になり、その後、周囲からの勧めもあり調教師の試験を受け、合格しました。

苦勞

日高管内の牧場に就職した時、きゅう務員時代、そして調教師になってからも、女性は珍しい存在で、完全な男社会の中で過ごしてきました。ばんえい競馬のきゅう務員になってからは、理不尽な事に対しては言い返せるようになり、「地震、かみなり、谷あゆみ」と言われていましたね。きゅう舎を構えた時も、「女のくせに」という見方もあったと思います。女だから技術的に劣っていても仕方ないと言われたくないと思っています。母親としては、子どものことだけに集中しきれない環境なので、申し訳ないという思いがあります。

満足度

2006年に馬5頭、きゅう務員さん1人という体制で谷きゅう舎を開業しました。今は、馬20頭、きゅう務員さんは5人になりました。調教師としての技量、きゅう舎の経営や成績など、まだまだ満足はしていません。3歳半になる息子が居ますが、出産してから自分が思うように仕事に携われなくなった時に、経営不振に陥りきゅう舎を畳むことも考えましたが、優秀なきゅう務員たちに支えられ、続けることができました。今は、徐々に、谷きゅう舎の名前も知られ、馬主さんから信頼を得られるようになってきましたが、まだまだこれからですね。

これから

きゅう舎としては、重賞レースの優勝馬を輩出できるきゅう舎を目指していますが、まずは、きゅう舎1棟に24頭入れるので、それを埋めたいと思っています。ばんえい競馬に携わる者としては、世界唯一の北海道の大切な馬文化を、私たちの世代で終わらせたくない。「バンバ」の血筋は、開拓時代から脈々と受け継がれてきたもので、この血筋が一旦途切れると、復活させるのは大変です。しっかりと守り、次の世代に繋いでいきたい。母親としては、子どもが物心ついた頃にも、現役の調教師としての姿を見せたい。そう思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

「継続は力なり」です。頑張り過ぎずに、目の前の事、自分の出来ることを「とつとつ」とやる。そうすることで、周りからの信頼も得られていきます。頑張り過ぎると、ある日、突然糸が切れてしまうこともあるかもしれません。頑張り過ぎず、自分のペースで進むことが大切だと思っています。

十勝【中札内村】

どうみ
道見 ひろみさん 株式会社あんていー 代表

1959年生まれ、中札内村出身。帯広農高卒業後、海外での農業研修を経て実家の農家を継ぎ、結婚。子育てが一段落付いた2007年に地元の道の駅改修に併せて、物産販売所と飲食店を開設。じゃがいもや枝豆、卵など新鮮な地場産品が大好評となる。



中札内の新鮮な野菜を味わってほしい

きっかけ

実家は石川県から十勝地方に入植して4代目を迎える農家。まだ女性が農業に携わることが少ない中、帯広農業高に進んで、農業の基礎などを学び、卒業後はデンマークで1年間、研修をしました。その後は、実家を継いで結婚。3人の子どもにも恵まれ、40歳ぐらいまでは農作業と子育てで精一杯。ようやく子どもから手が離れ、地元農協の女性部で役員をするなど、地域の会合に出るうちに「道の駅なかさつない」の改修に併せて、物産販売所開設の話が持ち上がり、仲間と一緒に準備を始めました。

苦勞

販売所は、地元の農家の皆さんの協力が不可欠です。それでも秋の収穫期を迎えると、野菜の品出しが大変になってしまいます。長年、地元で農業をしてきたので、仲間の農家がいづ、どのような作物を植え、収穫し、どこに運搬するのかを把握していました。だからこそ無理なことは言えません。そこを調整しながら、常に品揃えを意識し、お客さまが満足するよう心掛けています。さらに道外で人気の道の駅や物産販売所などを視察に行ったり、研究を重ねています。

満足度

中札内村に訪れる方が増えれば地域が元気になる、との思いから、販売所を手掛けました。じゃがいもや小豆、枝豆、卵などの農畜産品、パンなどの加工品や手芸品と、取扱う品物は多岐にわたります。地元の食材を使ったソーセージ、揚げ卵などの軽食を販売する「畑のキッチン・あんていー」も2007年に開設。とち帯広空港に近いため、観光スポットとして帯広市からも多くの方が買い物に来てくれ、年間来場者数は75万人にも達しました。旅行関連情報紙では、常に道の駅ランキングで上位にランクされるなど、認知度は高まっていますね。

これから

物産直売所をオープンして12年目を迎えます。毎年4月から11月までの期間限定営業ですが、卵は自動販売機で通年販売しています。春になると、長い冬を待ちわびてくれたリピーターのお客様がたくさん来てくれます。その方々に飽きられないよう、新たな取り組みをしていきたい。私たちが普段食べ慣れているホクホクしたジャガイモや甘いカボチャなど、新鮮な野菜をもっと広く知ってもらいたい。まずは家庭で簡単に調理できる加工品に取り掛かっています。

北の★女性たちへの
メッセージ

高校の時、女性が少ない中、自ら6人集めてバレーボール部を作るなど、自ら決めた目標に対して全力でぶつかってきました。この販売所も同じ。何事にも妥協せず、まずはチャレンジすることが大切です。それが実現した時、達成感に包まれ、幸せになれます。

十勝【大樹町】

じんぐうじ あさみ なかがみ みか
 神宮司 亜沙美さん・中神 美佳さん 大樹町地域おこし協力隊

2人とも大樹町出身。神宮司さん(1985年生まれ)は、東京都内のIT企業に就職。中神さん(1986年生まれ)は神奈川県の手自動車メーカーでマーケティング業務に従事。首都圏在住の道産子が集まるイベントで知り合い、2015年にUターン。地域おこし協力として、地元の魅力を発信している。



神宮司さん(左)と中神さん(右)



離れたからこそ気付いたふるさとの魅力を発信

きっかけ

お互いに大樹町出身ですが、東京都・神奈川県で就職し、首都圏に居住する道産子が集うイベントで出会いました。そこで同郷だと知り、さらに同じような境遇だったことで親交を深めていきました。それぞれ結婚していて、神宮司さんには子どもがいて、子育てを北海道でしたいという思い、さらに中神さんもUターンしたいという思いが一致。そんな時、大樹町役場で地域おこし協力隊の応募があると知り、夫や家族と相談を重ね、大樹町に移住。2015年から嘱託職員として勤務することになりました。

苦労

15年近く大樹町を離れていたの、正直に言うと、マチの魅力をどう発信していけば良いのか不安でした。地元の方から「このマチには何も無いからね」と言われますが、協力隊の仕事をやっていくうちに、子どもの頃にはそれほど感じなかった素晴らしい風景や美味しいピザを焼いてくれるカフェ、無添加のソーセージを作っている牧場など、町外に誇れる素材がたくさんあることを発見しました。お互い実家で暮らしていますが、夫と両親の協力もあって、ようやく家事と仕事を両立できるようになりました。

満足度

神宮司さんは、このほど創刊した町のフリーペーパー「ソラユメ」の編集長として取材、編集を担当。特集では、写真を交えながら町内のケーキ店や牧場経営者の方々を紹介しています。小さなマチですが、住んでいても知らないことは実は沢山あるんです。大変好評で次号は増刷も検討中です。中神さんは、ふるさと納税のお返し品をPRする仕事がメイン。自動車メーカーで培ったマーケティング感覚を生かしながら、特産のホー豚や和牛、チーズなどの乳製品をHPなどで紹介。何と納税額は約6倍にも跳ね上がりました。

これから

大樹町に住んでいる方がより楽しく暮らすことのできるような、そして観光に訪れた方や仕事で立ち寄る方がまた来くなるような、そんな素敵なマチづくりを目指しています。30年ほど前から大樹町では「宇宙のまちづくり」と称して、さまざまな活動をしています。「ソラユメ」は、宙(そら)に夢(ゆめ)を架けるマチの住民を紹介するマガジンです。ふるさと納税のお返し品に「ソラユメ」を同封し、道内外の方に大樹町をPRしています。3年の任期ですが、色々な事業を企画し、効果的な仕掛けを作っていきたいですね。

北の★女性たちへの
 メッセージ

離れたからこそ、ふるさとの魅力に気付いたのかもしれませんが。そして再び住んでみて、さらにこのマチが大好きになりました。だって生まれ育ったマチだから…。女性独自の目線で物事を捉えると、新たな発見があるかも。皆さんもふるさとの魅力を見つけてみませんか？

十勝【士幌町】

やまぎし あつこ
山岸 厚子さん せわやき玉子 代表

1956年生まれ、士幌町出身。23歳の時に、士幌町佐倉地区で入植から4代続く酪農家の夫と結婚。乳牛を飼育する一方で、娘と一緒にヨーグルトを製造する「さくら工房」を開設。2006年に「せわやき玉子」を立ち上げるなど、地域のアイデアウーマンとして多方面で活躍する。



男爵イモとこしあんで作ったスイーツ
「おいもとおまめがドッキングー！」

食文化を伝えながら、人と触れ合い・通じ合いたい

きっかけ

ポテトチップスで使用しているジャガイモをはじめ、新鮮な牛乳やしほろ牛肉など豊かな農畜産物に恵まれた町なのに、気の利いた地元のお土産って思い当たらないよね、と何気ない主婦の会話から始まったのが設立のきっかけ。それなら自分たちでやってみようと、異業種の女性6人が集まりました。地元の食材だけを使ったご当地グルメの開発から手掛けることになり、和食・洋食・中華などジャンルにこだわらず、いろいろな食材を持ち寄り、みんなて将来の夢を語り合いました。

苦労

メンバーは、私のような酪農家をはじめ、畑作農家、建築業者とさまざま。みんなが時間を合せて作業するには限りがあります。特に農繁期は集まることすらできず、集まっても意見が噛み合わず、みんなを調整してまとめていくのが大変でした。私たちの活動をPRするパンフレットも作りました。お揃いの割烹着を着て、6人がそれぞれ違った色のマフラーを付けるなど、さまざまな方に協力してもらいました。それでも和気あいあいと楽しむことをモットーに各種活動を続けてきました。

満足度

設立翌年の2007年に「食彩 in しほろ」と題した試食会を開催しました。まずは、町民に自分の町の素晴らしさを知ってもらうのが重要だと考えたからです。このように食をテーマにしたイベントは毎回盛況で、地元の農畜産物をテーマにした料理教室を開いたりしています。さらに料理コンクールにも参加。男爵イモとこしあんで作ったスイーツ「おいもとおまめがドッキングー！」は、あるコンテストの全国大会で最優秀に輝くなど、徐々にではありますが、目に見える成果が出てきました。

これから

世話好き、もの好き、しほろ好きの女性6人からスタートしましたが、そろそろ後継者を探す時期になりました。当然ながら、各酪農家、畑作農家にも同じような問題があります。まずは若者にこの町を好きになってもらいたい。こんなに食に恵まれた素晴らしい地域はありません。食文化を伝えながら、人と触れ合い・通じ合いたい。これからは若い方々の知恵と行動力を仰ぎ、うまく融合して、士幌町を総合プロデュースするような集団になりたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

「せわやき玉子」とは、玉子から何がかえるか分からないけど、とりあえず温め、育て、行動してみよう、そんな思いを込めています。世話焼き(好き)って決して悪いわけではなく、目配りが利くってことじゃないかな。そんな素敵な女性になりましょうね。

ゆあさ
湯浅ゆうこ
優子さん

スローフード・フレンズ北海道 リーダー

1950年生まれ、東京都出身。23歳の時、農業実習生として新得町へ。翌年結婚し、1996年に夫とともに日本初の酪農ファームイン「つっちゃんと優子の牧場のへや」を開業（現在は休業中）。2002年に北海道スローフード・フレンズ帯広（現スローフード・フレンズ北海道）を設立。



「母なる大地とともに生きる喜び」を広げて

きっかけ

昭和も終わりの頃、農場は乳牛を80頭ほど飼う規模にまで拡大しました。でも、少しずつ「おかしい」って思うようになりました。一日中がむしゃらに働いても経営は厳しく、余裕もなく働かされている、という思いが強まりました。ちょうど時代が平成に変わる頃、ヨーロッパの持続型農業を学ぶフォーラムに参加しました。衝撃でした。「農業は多様で良いんだ」と気付き、その後グリーン・ツーリズムを学び、ファームインを始めました。そうした中で、スローフード運動に出会いました。「自分が本当にやりたいこと、伝えたいことはこれだ！」と直感しました。

苦労

「食」に対する不安は多くの方が感じています。でも、「危機感」を持つだけでは何も変わりません。まずは、できることをやってみようと思い、多くの仲間と語り合いました。食のあり方を見つめ、暮らし方を変えていきたいという思いはいつのまにか、北海道でスローフードのネットワークとなりました。これまでの組織的なものではなく、フラットな関係を大切にするとともに、リーダーという存在は特別ではなく、みんなが各地で自主性を持って取り組んできたことが、ここまで来られたのだと思います。みなさんのおかげですね。

満足度

グリーン・ツーリズムに取り組む際、私のパイプは、当時農政部の主任で後に副知事になる荒川裕生さんたちが作った、ヨーロッパ農業に関するレポートでした。ここで紹介された都市と農村の共存・交流を実践するために、ファームインを開業しました。食卓を囲むことの楽しさ、大地の恵み、食の大切さ。お客様との交流から多くを学びました。私の原点です。スローフード運動のスローガンは「おいしい・きれい・正しい」です。農業・農村は、人と地域とつながりながら、大地に根ざして生きていく大切さと共にそのことを伝えられる場だと実感しています。

これから

2015年11月に、十勝、占冠、札幌の3会場で、北海道では初となる「テッラ・マードレ・ジャパン in 北海道2015」を開催しました。「テッラ・マードレ」は「母なる大地」という意味。様々な団体や個人が集い、つながり、食を育む大地の未来を考えようという、スローフード協会の世界的なミーティングです。多くの方と出会い、つながることができました。ボランティアで参加してくれた学生たちも、自発的に動き、手づくりのイベントを楽しみました。彼らの感動とたくましさは、大きな財産です。「母なる大地とともに生きる喜び」が次世代へとつながる手応えを感じました。

北の★女性たちへの メッセージ

おいしいものをみんなで食べると心が通い合い、会話も弾みます。人生はいろいろな悲しみや苦難もありますが、笑顔で楽しく生きることの大切さを忘れず、と思っています。暮らしや仕事に志や哲学を持つと、人生は豊かになります。食卓を囲む笑顔の周りには人が集まり、きっと生きる力になりますよ。